

むかしあつたげな

あるところに、お金持ちの旦那さんだんながいてそのお屋敷やしきでは、男の人がたくさん働いてはたらいました。その中に、いつもそばかりついている男がひとりいました。あんまりうそばかりついて人をだますので、みんなから「うそ平へい」とよばれていました。

あるとき、旦那さんがうそ平に、使いをいいつけました。うそ平は、

「はいっ」といつてでかけました。

どんどんどん歩いて行って、峠とうげの大きな杉すぎの木のところまで来ると、くるつと回れ右をして、お屋敷に帰って来ました。そして、

「旦那さん、旦那さん。お使いに行こうと思ったら、とちゅうの峠のところの大杉のてっぺんに、わしが巢すをかけていました」といいました。

「ほんとうか、うそ平」

「ほんとうでございます。おら、いま見て来ました」

旦那さんは、

「それなら、連れて行ってその巢を見せてくれ」といいました。

そこで、うそ平は、旦那さんを連れて、どんどんどん歩いて、大杉の下まで行きました。

「どのあたりだ」と、旦那さんが聞きました。うそ平は、

「旦那さん、木に登ってみてください。おらが下から教えますから」といいました。旦那さんは、木に登って、

「うそ平、どのあたりだ」と聞きました。

「もうちよつと上でございます」

旦那さんは、もうちよつと上まで登って、

「どうだ、まだ上か」と聞きました。

「いや、まだ上でございます」

旦那さんは、がんばって登って、

「うそ平、うそ平、どのあたりだ」と聞きました。

「いや、まだまだ上でございます」

旦那さんは、もうこれ以上登れないほど高くまで登りました。すると、うそ平は、だあつと走って帰ってしまいました。そして、おかみさんにいいました。

「おかみさん、おかみさん。いま、旦那さんが大杉から落ちて大けがをされました。もう命がないかもしれません。それで、髪を切って神さまにお祈りしてくれと、旦那さんがおっしゃっています」

おかみさんは、びっくりしました。

「やあ、ほんとうのことかい、うそ平」

「ほんとうでございます」

おかみさんが、大急ぎで髪を切って、神さまにあげようとしているところへ、旦那さんが帰って来ました。

「こら、うそ平。うそばかりついてからに。わしをだまたな」

旦那さんは、かんかん腹を立てて、屋敷の男たちにいいました。

「こいつを俵の中に入れて、海の中へ投げこんでこい」

男たちは、うそ平をつかまえて俵に入れてかつぎ、どんどん、どんどん歩いていきました。とちゅうで疲れたので、

「ちよつとここでひと休みしよう」といって、俵を道ばたに置いて、茶屋に入っけて休みました。

うそ平が、俵の編み目からのぞくと、魚売りが荷をかついでやって来るのが見えしました。魚売りは、なんだかとても目が痛そうでした。うそ平が、

「やあ、こりやあうまいことやらにやあ」と思っているうちに、魚売りは、すぐそばまで来ました。うそ平は、俵の中から、

かまいまい かまいまい 俵薬師の目の願

かまいまい かまいまい 俵薬師の目の願

と、となえました。魚売りは、

「おいおい、あんた、そんな所に入って、何をいつてるんだ」と聞きました。うそ平は、「それがなあ。おれは目が痛くてかなわんで、この中に入って俵薬師さまにお願いしているんだ。そうしたら、ありがたいことに、ずいぶん目がよくなってきた」といいました。

「ほんとうか。おれも、目が痛くて困っているところだ」

「ほんとうだとも。ちょっと俵の口を開けてみてごらん。こんなによくなったから」

魚売りが俵の口を開けると、うそ平は、目を見せて、

「ほれ、ほんとうだろ。おまえも中に入って俵薬師さまにお願いするといい」といいました。そこで、魚売りが、うそ平と入れかわりに俵に入ると、うそ平は、俵の口を固くしばってしまいました。それから、魚売りの荷をかついで、どつどつどつと、屋敷へ帰って行きました。

やがて、休んでいた男たちが、表に出て来ました。すると、俵の中から、

かまいまい かまいまい 俵薬師の目の願

かまいまい かまいまい 俵薬師の目の願

と、聞こえて来ます。

「何をいつてるんだ、うそ平。すぐに、海に持って行って投げこんでやる」といっても、

かまいまい かまいまい 俵薬師の目の願

かまいまい かまいまい 俵薬師の目の願

と、唱となえています。そこで、男たちは、俵をかつぎあげて海辺に持って行くと、どぼんと放りこんでしまいました。

いつぼう、うそ平がお屋敷に帰ると、旦那さんはびつくりして、

「おまえは、海に放りこまれたんじゃないのか」といきました。うそ平は、

「なんと、旦那さん。おまえさんのおかげで、おら、竜宮りゅうぐうへ行きました。竜宮というところは、そりゃあ、きれいな所でございます。タイやらタコやらイカやら、サバやらアジやら、たくさん遊あそんでいました。まあ、りっぱな所でございました」といいました。

「ほんとうか、うそ平」

「ほんとうでございます。その証拠しょうこに、おら、タイやらタコやらイカやらを土産みやげに持って来ました」

旦那さんが見てみると、魚かごの中に、魚がいっぱい入っていました。

「いやあ、こりゃ、まあ、うそ平。わしも竜宮へ連れて行ってくれ」

「はい、なんぼうでも連れて行ってあげます」

うそ平は、旦那さんを連れて海辺うみべに行きました。そして、

「旦那さん、先に行ってください」といって、旦那さんの背中せなかを押おしながら、海に入って行きました。

「うそ平、まだか」

「いや、まだもつと先ですよ」

ふたりは、どんどん、どんどん海の中を歩いて行きました。だいぶん深く^{ふか}まで来たところで、うそ平は、旦那さんの背中をどーんとつきました。旦那さんは、海にしずんできました。

うそ平は、お屋敷に帰って、おかみさんにいました。

「おかみさん、おかみさん。旦那さんが、『竜宮はともいいところだから、わしは帰らない。おまえ、帰ったら、うちのおかみさんと一緒^{いっしょ}になつて、わしのかわりに、旦那になつてくれ』とおっしゃいました。それで、おら、もどつてまいりました」

こうして、うそ平は、その家の旦那さんになつて幸^{しあ}せに暮^くらしました。

うそをつくなら、いいうそをつかないといけません。けちなうそをつくと、人にしかられたり、痛めつけられたりするばかりです。けれども、いいうそをつくと、なんでも、いいほうへいいほうへ回^{まわ}つて行^いつて、こんないいことになつたという話。

こつぽし

村上郁再話

資料『鼻きき甚兵衛―出雲の昔話』田中榮一編／桜楓社